

濱文庫について(2)

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

<https://hdl.handle.net/2324/8516>

出版情報 : 貴重文物講習会. 2, 2007-11-26. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

◎瀨文庫について◎

竹村則行

(九大貴重文物講習会、二〇七、一、三六
六本松附属図書館)



瀨一衛教授 略歴

(一九〇九)
 明治四十五年 九月 二日 大阪市東区今橋三丁目に生る
 昭和二年 三月 四日 大阪府立高津中学校卒業
 昭和五年 三月 十日 大阪府立浪速高等学校卒業
 昭和八年 三月 三十日 京都帝国大学文学部支那語支那文学専攻卒業
 昭和九年 三月 三十一日 願により文学部副手の嘱託を解かる(外国留学のため)
 昭和十二年 五月 十三日 京都帝国大学派遣外務省文化事業部留学生として二ヶ年北京留学
 昭和十二年 三月 三十日 兵庫県灘中学校教諭
 昭和十三年 三月 三十日 松山高専商業学校教授
 昭和二十四年 三月 三十一日 松山商科大学教授、兼て松山経済専門学校教授
 昭和二十四年 八月 三十一日 九州大学助教授(教養部)(一九四九)
 昭和二十八年 三月 一日 九州大学教授
 昭和二十八年 四月 一日 文学部講師併任、九州大学大学院授業担当
 昭和三十年 九月 一日 教養部審議会委員(昭和三十一年九月三十日まで)
 昭和三十一年 七月 一日 島根大学文学部講師(昭和三十三年九月三十日まで)
 昭和三十三年 五月 一日 京都大学文学部講師(昭和三十七年三月三十一日まで)
 昭和三十七年 二月 七日 文学博士の学位受領
 昭和三十七年 十一月 二十四日 二十年精勤表彰
 昭和四十四年 四月 十四日 佐賀大学教養部講師(昭和四十六年三月三十一日まで)
 昭和四十四年 四月 一日 三十年精勤表彰
 昭和四十八年 三月 三十一日 九州大学附属図書館教養部分館長
 昭和四十八年 四月 一日 三十六年精勤表彰
 昭和五十九年九月十日 停年により退職(一九七三)
 (一九八四) 逝去(七十五歳)

瀨一衛教授 研究業績
著書・訳書

北平的中国戯
支那芝居の話
秋豊園 昭和十一年十二月十日
 琵琶記(全訳)全四十四幕(中国古典文学全集第三十三卷)
弘文堂 昭和十九年三月三十日
 日本芸能の源流
角川書店 昭和三十四年十一月二十六日
 拜月亭記(全訳)全四十幕(中国古典文学大系第五十二卷)
平凡社 昭和四十三年三月三十日
 昭和四十五年十一月五日

論文

最近に於ける北崑の変遷
平戯考 支那学 第十卷第三号 昭和十六年
 北京に於ける梆子腔について 松山高商論集 第四号 昭和十七年
 東京並びに上海に於ける文明戯について 支那学 第十卷第四号 昭和十七年
 譚鑫培 松山高商論集 第五号 昭和十八年
 皮黄の成立 中華名家言行録所収 弘文堂 昭和二十二年
 半新半旧劇の変遷 松山商科大学創立記念論文集 第一号 昭和二十七年
 春柳社の黒奴顔天録 日本中国学会報 第五号 昭和二十八年
 臉譜源流 東方学論集 第一 第二号 昭和二十九年
 長崎の中国劇 文学論輯 第三号 昭和三十年
 唐人踊について 文学論輯 第七号 昭和三十年
 臉譜と限取 日本中国学会報 第七号 昭和三十年
 梁山伯と祝英台 中国文芸座談会ノート第五号 昭和三十年
 南崑の変遷 文学論輯 第四号 昭和三十一年
 日中輕業の展相 文学論輯 第五号 昭和三十一年
 伎楽源流考 中国文学報 第九冊 昭和三十三年
 舞台の馬について 文学論輯 第六号 昭和三十三年
 角觥百戯について 文学論輯 第七号 昭和三十四年
 勾欄と勳進棧敷 文学論輯 第八号 昭和三十五年
 四声猿 中国の名著 所収 勁草書房 昭和三十六年
 中国劇の脚色について 文学論輯 第九号 昭和三十七年
 中国の女優について 文学論輯 第十号 昭和三十八年
 北京の劇場 文学論輯 第十一号 昭和三十九年
 文献通考に見る唐代の散樂百戯について 九州中国学会報 第十卷 昭和三十九年
 相公について 日加田博士還暦記念論文集 昭和三十九年
 明清楽覚え書 其の一 明楽 文学論輯 第十二号 昭和四十年
 明清楽覚え書 其の二 清楽一 文学論輯 第十三号 昭和四十一年
 明清楽覚え書 其の三 清楽二 文学論輯 第十四号 昭和四十二年
 唐の傀儡戯とくぐつ 吉川博士退休記念論文集所収 昭和四十三年
 傀儡戯の起源と今日の木偶劇 文学論輯 第十五号 昭和四十三年
 舞台の藝妓目割りについて 文学論輯 第十六号 昭和四十四年
 TAKEUMA ACTA ASIATICA 17 昭和四十四年
 1969
 竹馬について—日本と中国との— 文学論輯 第十七号 昭和四十五年
 中国劇の仮面 文学論輯 第十八号 昭和四十六年
 京劇俳優の名前について 文学論輯 第十九号 昭和四十七年
 日本における京劇 中国文学論集 第四号 昭和四十八年
 中国戯曲劇種一覽稿 文学論輯 第二十号 昭和四十八年

- 74 談香女吳瓜一卷 一冊
- 76 王員外休妻一卷 一冊
- 78 新出勸姑娘全詞一卷 一冊
- 80 新刻小倆口擇燈小段二卷 一冊
- 82 大鼓書段改良勸夫二卷 一冊
- 84 小倆口拜年全段一卷 一冊
- 86 趙小姐守節一卷 一冊
- 88 新刻金山寺第三冊 一冊
- 90 玉姐發家一卷 一冊
- 92 燈虎一卷 一冊
- 95 羅成算命一卷 一冊
- 98 大鬧天宮一卷 一冊
- 75 關公單刀赴會二卷 一冊
- 77 新刻枕頭案一卷 一冊
- 79 四頁上工一卷 一冊
- 81 南方瀟湘打骨牌一卷 一冊
- 83 新刻草船借箭一卷 一冊
- 85 新抄畫扇面一卷 一冊
- 87 新刻朱實臣休妻一卷 一冊
- 89 十二月古人名一卷 一冊
- 91 小看戲一卷 一冊
- 94 新抄打新春一卷 一冊
- 96-97 大鼓段詞小寡婦上墳二卷二冊 又二冊
- 99 姑娘勸夫郎一卷 一冊

(中國戲劇本冊)第三卷

(一八八四)(一九〇三) 光緒十(二十九)年

寶文堂 松月堂 第一書局 上海 北京 致文堂 錦文堂 聚魁堂

續野山房 風香山房 登春書堂

- 1 新抄狐仙段一卷 一冊
- 3 新出快飛煙煙二卷 一冊
- 5 新刻野雞台狀一卷 一冊
- 7 大鼓從妻單弦一卷 一冊
- 9-10 打春歌一節及父二卷 一冊 又二冊
- 2 大鼓書目連年救母一卷 一冊
- 4 新出勸姑娘全詞一卷 一冊
- 6 新出佳人織機十恨十樂全詞(女子織機)一卷二冊
- 8 南方雜曲改良時調調兵一卷 一冊
- 11 王大寶一卷 一冊
- 1186007451

- 12 新出王香雲休妻二卷 一冊
- 14 新抄何氏賣身一卷 一冊
- 16 新刻朱實臣休妻一卷 一冊
- 19-20 高蘭香遊地獄一卷 一冊 又二冊
- 22 新刻古人名臺目單廣州一卷 一冊
- 24 新刻十一重樓一卷 一冊
- 26 新刻花燈名(二百花燈名)一卷 一冊
- 28-29 新刻大鼓書長板坡一卷 一冊 又二冊
- 31-32 新編改良大鼓書信算卦一卷 一冊 又二冊
- 34 新出醒世良言勸姑娘破片(四枚)
- 37 二郎爺孫大聖兩法大鬧天宮一卷 一冊
- 40 新刻大鼓書華容道小段一卷 一冊
- 42 雜牌子杜十娘怒沈白雲箱一卷 一冊
- 44-45 拾金致全段李翠蓮盤道一卷 一冊 又二冊
- 47 騷歌對詩一卷 一冊
- 49 新刻子古狸貓全段蓮花落詞(耗子生貓)一卷 一冊
- 51 新刻寶詞山西五更一卷 一冊
- 53 新詞雜槽回頭一卷 一冊
- 54 新刻切絲槽一卷 一冊
- 56 新編十二月大寶話一卷 一冊
- 58 新刻姑娘十一漂一卷 一冊
- 13 並無錯字書單羊一卷 一冊
- 15 新出張飛赴船截江奪斗一卷 一冊
- 17-18 新刻在陳絕糧段一卷 一冊 又二冊
- 21 新刻丁香割肉一卷 一冊
- 23 庚子在羅成斗關一卷 一冊
- 25 與眾不同王員外妻一卷 一冊 外
- 27 新出寶慶(中)松元一卷 一冊
- 30 新編劉寶全准詞黃忠馬失前蹄一卷 一冊
- 33 包公誇案一卷 一冊
- 35-36 新出大鼓書詞改良勸夫破片(四枚)(又三枚)
- 38-39 新出大鼓書詞湯羅書一卷 一冊 又二冊
- 41 一枝花梢書佳人寫書段一卷 一冊
- 43 新出小姑出閣一卷 一冊
- 46 新王會川跑關東一卷 一冊
- 48 行孝段一卷 一冊
- 50 新刻四寶一卷 一冊
- 52 甲申冬月切絲槽一卷 一冊
- 55 小尼思凡一卷 一冊
- 57 新刻寶玉探病一卷 一冊
- 59 改良文明棍一卷 一冊
- 新出文明大鼓書詞

杜十娘（怒沈百宝箱）（杜十娘が怒って百宝箱を沈めること）

あらすじ： 時は万暦 20 年（1592）のこと。主人公（男）は江南出身の**李甲**、北京の国子監に入り、科挙合格を目指している受験生。一方のヒロイン（女）は 19 歳、この道 7 年の北京妓女**杜十娘**、現在は北京花柳界の売れっ娘スターだが、心中密かに良人との結婚を夢見ている。

ある時、遊郭に遊んだ李甲はすっかり杜十娘に魅せられ、杜十娘も純朴な青年李甲に心を寄せる。二人は遊郭で多くの時を過ごす。李甲は故郷の厳父を恐れ、杜十娘の落籍を切りだせない。やがて、李甲は遊興資金（もと受験用）が乏しくなり、杜十娘もお客を取らぬようになったので、妓郭のおかみ（継母）は李甲を諦めさせるために、“10 日間に 300 金を用意すれば杜十娘の落籍を許可する”ことを告げる。李甲は金策に苦しむが、杜十娘の 150 両と友人**柳遇春**からの 150 両を何とか工面して、遂に杜十娘の落籍に成功する。

妓館では姉妹たちが帰郷する二人の送別の宴を開き、鍵付きの**百宝箱**を贈る。

やがて江南に着いた二人は、明日は帰宅するという前夜、杜十娘が久し振りに舟上で唱った歌を、偶々隣舟に居合わせた新安商人の**孫富**が耳にする。嵐で出発を見合わせた李甲を孫富は言葉巧みに誘い出し、二人の結婚に厳父が反対する事等を理由に、千金で杜十娘を孫富に譲ることを約束させる。

夜遅く舟に帰った李甲からその話を聞いた杜十娘は、冷笑してその話を承諾し、翌朝着飾った妓女姿で現れる。杜十娘は観衆の前で孫富や李甲を罵り、百宝箱から宝石類を取り出しては次々に河に投げ込み、果ては百宝箱を抱いて入水して果てる。

後日、柳遇春の前に幽霊の杜十娘が現れ、百宝箱を返して、お世話になったお礼を言う。

原話： 明・宋懋澄『九籥集』所収「負情儂伝（薄情者伝）」

明・馮夢龍『警世通言』卷32（『今古奇観』卷5）「杜十娘怒沈百宝箱」
『情史』卷14、情仇類

翻案： 江戸・都賀庭鐘『繁野話』「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話」

現代・林語堂『杜十娘—北京における歌妓哀話』（佐藤亮一訳、朋文社、プラタン叢書、1956）

論文： 植田渥雄「「杜十娘」考—「杜十娘怒沈百宝箱」とその原本とのかかわり」

（桜美林大学『中国文学論叢』9、1982）

伊藤徳子「『杜十娘』論」（奈良女子大学大学院『人間文化研究科年報』14、1998）